

# 契丹大字解讀の手がかり

1993年8月

日本

豊田五郎

## 一、はしがき

契丹語の場合大小字を問わず單語毎に契丹文字と漢字を対訳した辞書は未発見である。現存資料は殆んど墓誌銘で、漢文のものと契丹文のものがあるが、内容がかなり異なるので解讀を困難にしている。

契丹小字では借用漢語と表音原字の研究により或る程度讀める様になったが、契丹大字は表意文字が多いので解讀が仲々進まない。しかし漢字をその儘使用したり、多少変形しても漢字の面影のあるものは原意を類推出来る筈である。

オルホンの突厥ルーネ文字の解讀がどの様に行われたかは参考になる：

1. 字母を數えて音節文字と決定した。
2. 文字順により母音字母を確定した。
3. 文字群をとり出し頻繁に現れる名詞を探した。
4. 漢文碑と対照して固有名詞を見付け、個々の文字の音価を決定した。

契丹大字資料として今日迄発表された主要なものは次の如くである：

資料名	(出土年)	伴出漢文	原石
1. (蘭) 大遼大横帳蘭陵郡夫人 建静安寺碑	発表年 1936	○	○
2. (記) 故太師銘石記	1942	×	×
3. (忠) 蕭孝忠墓誌	{ <sup>(1951)</sup> 1957	○	○
4. (延) 耶律延寧墓誌	{ <sup>(1984)</sup> 1980	○	○
5. (北) 北大王墓誌	{ <sup>(1975)</sup> 1983	○	○
6. (賈) 応曆碑 (賈敬顔拓本)		×	×
7. (魯) 蕭袍魯墓誌	{ <sup>(1985)</sup> 1988	○	○
8. (習) 耶律習涅墓誌	{ <sup>(1987)</sup> 1991	○	○

## 二、文献

- 李文信 1942：契丹小字〈故太師銘石記〉之研究
- 閻万章 1957：錦西西孤山出土契丹文墓誌研究  
1988：契丹文〈蕭袍魯墓誌銘〉研究  
1990：關於契丹大字墓誌紀年的考釈問題
- 金光平 1962：從契丹大小字到女真大小字
- 劉鳳翥 1979：關於混入漢字中的契丹大字“𐰺”的讀音  
1982：契丹大字中的紀年考釈
- (馬俊山と共同) 1983：契丹大字〈北大王墓誌〉考釈
- (于宝林と共同) 1984：〈耶律延寧墓誌〉の契丹大字釈讀举例  
1988：契丹大字中“六”の解讀歷程  
1991：若干契丹大字の解讀及其他  
1992：契丹大字“五”の讀音
- 金永田 1991：契丹大字〈耶律習涅墓誌〉考釈  
清格尔泰  
劉鳳翥外3名 1985：契丹小字研究
- 長田夏樹 1983：契丹語解讀方法論序説
- 豊田五郎 1963：契丹隸字考  
1984：契丹大字の日付について

《考古》1991年第4期に掲載された金永田の《契丹大字“耶律習涅墓誌”考釈》によると、1987年秋内蒙古赤峰市巴林左旗で発見された《耶律習涅墓誌》は、墓誌蓋に契丹大字37行1616字を陰刻し、伝世契丹大字資料中中字數最多で保存完全である。漢文墓誌は漢文26行601字を刻んでいる。

私は1992年11月20日大阪外国語大学で《遼金文字の解讀》と題する講演を行い、その歸途京都の中西亮氏を訪れた際、内蒙古大学の陳乃雄教授から中西氏に贈られた《耶律習涅墓誌》の拓本を見せて貰い、同氏の好意でそのコピーを戴くことが出来た。これにより前掲書の墓誌文摸本と対照して明瞭に字形を確認することが可能となった。

### 三、墓誌銘

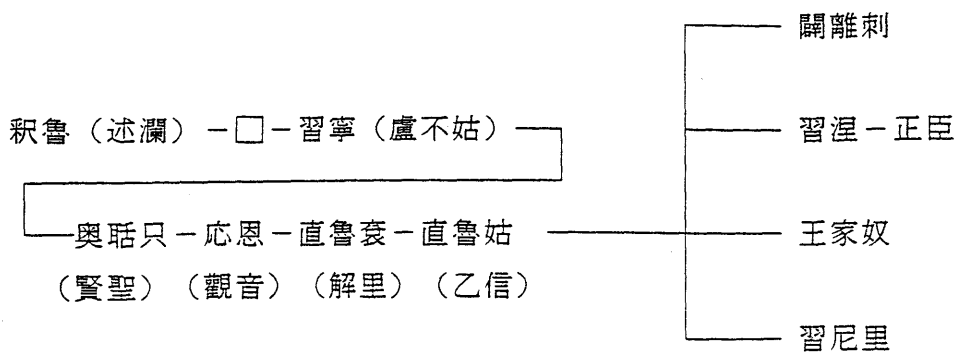
漢文《耶律習涅墓誌》を見ると第1行は故人の官名を記し墓誌銘并序とする。墓誌は序と銘の二部に分れ第2行から第19行初“辞曰”迄は前文はしがき“序”であり、後半“天開貴冑”以下が“墓誌銘”本文である。

契丹大字墓誌も同様の格式をとっている。第1行は3段に区切られ初めは題詞である。第19、20字斗寺を私は“塋に”と解釈し第21、22字の寺𠂔（劉鳳翥・馬俊山1983ですでに銘と釈讀）と合わせると“塋に銘す”である。次の赤州斤𠂔𠂔𠂔を金永田1991は“并序”と解している。次段は撰者の肩書きで、その次に撰者名があり末尾の𠂔𠂔は“撰”である。《応曆碑》第1行にも斗寺寺𠂔があり“塋に銘す”で、《北大王墓誌》第1行には斗寺(塋に) 𠂔余(刻める) 𠂔米之(墓誌)、《蕭袍魯墓誌》第1行には𠂔米之寺寺𠂔“墓誌に銘す”とある。序文末尾の“銘曰”は《習涅墓誌》第33行に寺𠂔𠂔、《北大王墓誌》第21行に𠂔𠂔𠂔𠂔、《応曆碑》第12行に寺𠂔𠂔とあり、《故太師銘石記》では寺𠂔𠂔となっている。

銘は《応曆碑》第11行、《習涅墓誌》第32行末では寺𠂔と書かれ、寺𠂔とは現在形、過去形のような対立があったと思われる。𠂔と𠂔は同字異形で、𠂔𠂔を合書すると寺𠂔となる。漢字曰から𠂔が導かれ、更に合、𠂔の書き方があるが、すべて同字であることは閻万章1988も認めている。

漢文墓誌銘の場合、序は散文で書かれ、銘は韻文で書かれるのが普通であるが、契丹大字は表意字が多いので、銘は6～8字で区切られた詩であることは判るが、韻をふんでいたかどうかは確認出来ない。

序は家系の叙述から始まり、先祖以来の経歴官職、婚嫁子女の状況、故人の一生について記し、死亡埋葬、墓誌の筆者等々を述べる。《耶律習涅墓誌》漢文と《遼史》七六、七九を見比べると耶律習涅の世系はこうである。(金永田1991)



四、漢文《習涅墓誌》人名の契丹大字との比較

續柄	諱	小字	官職等
(1) 六代祖	習寧	盧不姑	于越王兵馬大元帥
(2) 高祖	奧聒只	賢聖	枢密使西平王
(3) 曾祖	応恩	觀音	節度使
(4) 祖父	直魯袞	解里	太尉
(5) 父	直魯姑	乙信	大横帳郎君
(6) 本人	習涅	杷八	興復軍節度副使
(7) 長兄	關離刺	不迭里	雲内州節度使
(8) 次弟	王家奴		郎君
(9) 季弟	習尼里		郎君
(10) 長妹	杷兒娘子		大国舅韓家奴太保夫人
(11) 次妹	年歲好娘子		大国舅拽刺將軍夫人
(12) 故妻	捺割		大国舅乍里太師女
(13) 次妻	某		大国舅阿思不里太師女
(14) 長男	正臣		

契丹大字《習涅墓誌》から王字を拾って見よう。

2行 左 賢 太 王 … (1)      8行 互 完 齊 元 牛 太 三

5行 孛 乎 統 三 … (2)      18行 三 牙 化 元 齒 … (8)

従って(1)は“于越大王”、(2)“西平郡王”、(8)“王家奴郎君”と假定することが出来る。

(1) 習寧(盧不姑)は《遼史》七六に“耶律魯不古、字信寧太祖從姪也”といい、于越北院大王で終った。北院大王は北大王院の長で北大王と稱された。契丹大字太三はその略稱であり金永田1991は左賢太王を“于越大王”と読んでいる。又漢文墓誌に兵馬大元帥というのは祖先を美化した称号で、臣下で皇位継承にかかわるこの大号はあり得ず、実際は西南辺大詳穩(西南路招討使)であった筈である。

(2) 奧聒只(賢聖)は《遼史》七九に“耶律賢適、字阿古真、于越魯不古之子”とあり、北院樞密使を拜し、西平郡王に封ぜられた。この孛乎統三は“西平郡王”と読んで差支えなく、西平王は略稱である。

次の某大王については後述する。

(8) 王家奴は《遼史》表四にも見えるが別人である。この18行を詳しく見ると元弟女三牙化元齒序而之元齒忌仁依背という句が、漢文墓誌第8行の“弟王家奴郎君季弟習尼里郎君俱不仕”に対比出来る。そこで私は元弟を“弟”、三牙化を“王家奴”、元齒を“郎君”、序而之を“習尼里”、忌仁依背を“俱に任ぜず”と解釈する。これを第19行の三牙化太申峯冬画齐に應用すると、漢文墓誌第9-10行の適大国舅韓家奴太保に当り、三牙化を“韓家奴”、太申を“太保”、峯冬画齐を“適す”と解釈することが出来る。太申は第4-5行にもあり同じく“太保”となし得る。

(3) 応恩(觀音)は《遼史》七九賢適傳に“子觀音、大同軍節度使”という。墓誌第6行を詳細に見ると使此使此午巳送中乃正五京早克序用一脊に受安の1~9字は第18行兄弟子兄弟之太景仁必风使此使此午巳送中乃の12~20字と同じで後者は漢文墓誌第7行にある“兄關離刺小字不迭里、見任雲内州節度使”に該当する。そこでこの9字は“雲内州節度使”であることがわかる。次の1字において五京早克序を、金永田1991は“西京副留守”と釈讀しており正確である。克は漢字“流”の旁からとったもので

“留”の音を表わす。《北大王墓誌》第5行では“夫人留女”を齊仁亮石と書いている。亮は漢字の“劉”をも表わし《故太師銘石記》第11行に亮牙化特昇“劉家奴將副”があり、第36行にも亮牙化“劉家奴”がある。凡工は人名で“觀音”を指す。《北大王墓誌》第4行に齊仁亮安凡があり、その漢文墓誌第4行の“大王先娶達曷娘子”に対応するが齊仁について私は1991年7月《契丹大字“夫人”について》を書いてこれが“夫人”に当ることを論証した。従って凡工齊仁亮安は“觀音夫人達曷”と讀める。又第8行至完太三は“韓留大王”であろう。

(7) 關離刺(習涅の兄)に関する第18行の第7-8字太景は《蕭孝忠墓誌》第1、2、3行にもあり、その漢文墓誌第3行にある“乾寧軍大帥靜江軍節度使蕭孝忠”に対応するもので私は“太師”と讀む。《故太師銘石》第12、23行では天景と書かれ女真字天(大)の源をなす。そこで本文第18行の兄弟は“兄”で予兄父之は“關離刺”、太景は“太師”、仁仗は“任”であり、佚此佚此予已之牛乃は“雲内州節度使”と解釈出来る。景が“師”を表わすとすれば《蕭孝忠墓誌》第14行にある各景化齊齊仁完升は“藥師奴の夫人留勝”と讀めるし、《習涅墓誌》第7行の各景行瓜は“藥師女得”と讀むことが出来る。凡は漢文で“娘子”であり婦女名の末尾に用いる愛稱らしく、第12行に亮齊仁司昇瓜“次夫人乃合得”、第21行に亮齊仁昇升瓜“次夫人西因得”がある。女真字で昇は“羣”の略、升は“因”と讀む。

習涅家族表(4) 祖父直魯衰について漢文墓誌は“太尉諱直魯衰小字解里即公之祖也”と記載し、第7行牛介或第8行太尉仁仗亮昇元吉と対応する。太尉は“太尉”、仁仗は“任”で亮昇元吉は“左祇候郎君”であるから牛介或が“直魯衰”に当るらしい。太尉は第5行と第9行にも見える。

(5) 父直魯姑について漢文墓誌は第3行に習涅が“大横帳乙信直魯姑郎君”の子と記すだけである。又“大國舅鄭九郎君長女乃合得夫人、即公之母也”と母の事を記している。

第7-8行の直魯衰郎君、第18行の(8)王家奴郎君と(9)習尼里郎君については契丹大字が判明した。第9行太尉肉田凡ニ齊凡も已齊牛元

云仁侯の句を私は“太尉□田得 兒男直魯姑郎君任”と讀む。太尉の直魯  
 衰とその妻□田得の息子直魯姑郎君云々である。第13行<sup>安</sup>交<sup>牛</sup>元<sup>司</sup>虎<sup>舟</sup>太  
 安<sup>行</sup>二<sup>脊</sup>を私は次のように讀む：(6)“公は郎君鄭九長女の兒”。第22行  
 凡<sup>元</sup>安<sup>侯</sup>光<sup>元</sup>司<sup>王</sup>牙<sup>又</sup>を“男(14)正臣郎君歳十□”。第11行<sup>之</sup>及<sup>牛</sup>元<sup>司</sup>  
 吾<sup>冬</sup>子<sup>瓜</sup>二<sup>脊</sup>化<sup>司</sup>の初2字は<sup>之</sup>又<sup>天</sup>太后“儀天太后”の儀で1～5字は  
 “儀牛郎君”と讀める。吾<sup>冬</sup>子<sup>瓜</sup>は婦女名で二<sup>脊</sup>化<sup>司</sup>は“兒娘”とでも假  
 に訳しておく。次の句はこうである：凡<sup>今</sup>脊<sup>仁</sup>五<sup>世</sup>卅<sup>寺</sup>并<sup>可</sup>之<sup>半</sup>脊<sup>れ</sup>。  
 劉鳳翥1991を参照すると“故夫人歳廿四で死亡す”と解釈し得る。前後の  
 文から判断すると儀牛郎君と某女の娘たる直魯姑の故妻が歳二十四で死亡  
 したということで、第12行に直魯姑の次夫人の乃合得が鄭九の娘であるこ  
 とを記載する。虎<sup>脊</sup>仁<sup>司</sup>亨<sup>瓜</sup>文<sup>元</sup>舟<sup>安</sup>行<sup>乃</sup>“次夫人乃合得は鄭九の女”これは  
 前述の漢文に対応する。漢文《習涅墓誌》第10行に“次妹年歳好娘子適  
 大国舅揆刺將軍”とあり、これに対応する契丹大字は第20行にある：鬼<sup>火</sup>  
 外<sup>瓜</sup>文<sup>司</sup>已<sup>早</sup>有<sup>之</sup>卷<sup>日</sup>赤……可<sup>二</sup>将<sup>示</sup>脊<sup>冬</sup>乳。鬼<sup>火</sup>外<sup>瓜</sup>は(11)“年歳好娘  
 子”、文<sup>司</sup>已<sup>乙</sup>室<sup>巳</sup>、早<sup>有</sup>之<sup>国</sup>舅<sup>”</sup>、卷<sup>日</sup>赤<sup>帳</sup>、可<sup>二</sup>将<sup>示</sup>  
 “揆刺將軍”、脊<sup>冬</sup>乳<sup>適</sup>す”である。

第8行にも<sup>将</sup>示<sup>將軍</sup>があり、すでに解読されたものに《延寧墓誌》  
 第4－5行<sup>金</sup>及<sup>太</sup>示<sup>金</sup>吾<sup>大</sup>將軍”があり、《故太師銘石記》第15行小  
<sup>将</sup>示<sup>小</sup>將軍”がある。習涅の妹(10)は漢文第9行“故妹杷兒娘子、適  
 大国舅韓家奴太保”とあり、契丹文第19行がこれに当る：凡<sup>今</sup>“故”<sup>瓜</sup>州  
 赤<sup>有</sup>瓜<sup>杷</sup>兒<sup>娘</sup>子”<sup>王</sup>牙<sup>化</sup>太<sup>保</sup>“韓家奴太保”脊<sup>冬</sup>回<sup>木</sup>“適”。

## 五、頻出單語群の探索

私は1992年2月《契丹大字單語群の類聚と釈讀》なる小文を書いて、契  
 丹大字に頻出する單語群をしらべ、下記の數個を識別したが太師、夫人な  
 どの借用漢語以外の讀み方は未詳である。

交寸巳 早可之 咎田采 (習1) 否史 北化 (習1)  
 乙室巳 国舅 帳。 蕭 北奴  
 戾予 早可之 咎田 (習8) 否史 妾何 (習5)  
 大 国舅 帳。 蕭 女。  
 瓜兮 咎田采 (習26) 妾交 (習2) 太東 (習19) 二脊此 (習5)  
 故 捺割 (得)。 公。 太保 兒子。  
 某帝太果 (習21) 脊岑没太果 (習22) 脊仁至戾央 (北6)  
 乍里太師。 阿思不里太師。 夫人中哥。

漢文墓誌により故妻と次妻の対立がわかる。契丹大字で 瓜兮“故”と虎  
 “次”を冠する。既述の如く直魯姑の故妻は儀牛郎君の娘で、次妻乃合得  
 は鄭九の娘であった。習湜の故妻(12)捺割は乍里太師の娘で、次妻(13  
 )は21、22行にこう記される：虎脊仁“次夫人”戾利瓜“西因得”、交寸  
 巳“乙室巳”早可之“国舅”咎田采“帳”脊岑没太果“阿思不里太師”と  
 矣攸育“某々”妾何“女”の 二脊此“兒子”。

上記單語群の組合わせで《習湜墓誌》を讀んで見る。第1行の撰者の肩  
 書は 交寸巳早可之咎田采“乙室巳国舅帳の”で、撰者名は 否史北化“蕭  
 北奴”である。第5行 戾予早可之脊仁否史妾何 戾予早可之是乃太初脊邪矣否  
 次妾何 二脊此は“西平郡王夫人蕭女は大国舅□□太尉□□蕭女兒子”第6  
 行 瓜兮脊仁矣安妾何交寸巳早可之行余将早瓜は“觀音夫人達曷女は乙室巳  
 国舅□□將副の子”である。第7行の 虎守矣安妾何 二脊化育 二瓜兮脊果行  
 瓜交寸巳早可之共亦女邪太守冬面脊は“留守と達曷女の兒娘□故葉師女得  
 は乙室巳国舅□□□□□に適す”である。第6行の将早は《北大王墓誌》  
 第2行、《蕭袍魯墓誌》第10-11行、《故太師銘石記》第4、6、11、20  
 、32行にもある。私は宋史にある“將副”と考えるが或いは“相府”かも  
 知れない。契丹小字で“將”も“相”も siang で音通である。《北大王  
 墓誌》第16行と《蕭袍魯墓誌》第12行に 果将脊午 という單語群があり、師  
 と使は同音なので私はこれを“使相の母”と解釈する。“適す”について  
 は 冬面脊(習7)、脊冬面脊(習19)、脊冬丸(習20)と形は変っている  
 が冬が“適、嫁”の語幹であろう。



## 六、皇帝名と日付の問題

《習涅墓誌》には皇帝名と日付が書かれており、年代を定める決め手となる。第3行**丞皇帝**は太祖“天皇帝”のことで**邛玟莽**の**玟**はすでに“時”と解讀されている。私は續けて“天皇帝朝時に”とする。同じ行の**丞凡皇帝邛玟莽**を私は“天子皇帝朝時に”とする。第2字の**凡**は**二魯凡**“兒子”の“子”として何度も現われ、契丹小字で**奚母為主王**“天子皇帝”といえは太宗の稱号である。従って第2行から第3行にかけて先祖の于越習寧即ち魯不古の記事と確定される。魯不古については島田正郎《遼朝官制の研究》1978によると“契丹国字の制定に功があり党項征討に軍功の高かった人”で……“契丹国字の制定は神册五年（920）、党項征討は会同元年（938）から三年のことで……于越に任じたのは太宗の会同初年以前おそらくは天顯中と断ずる”。会同五年于越信恩（信寧即ち魯不古）に代って隈恩が西南路招討使に任じ、六年（943）魯不古は北院大王となり五十五歳で没した。これは太祖太宗の治世と一致する。その子賢聖は賢適で乾亨二年（980）西平郡王を以て五十三歳で死んだ。

賢聖の子**応恩**即ち**觀音**は景宗、聖宗、興宗に仕え、節度使、西京副留守であった。第4行に見える三皇帝名はそれを表わす：**丞先皇帝**“天贊皇帝（景宗）”、**丞魯皇帝**“天輔皇帝（聖宗）”、**丞凡先皇帝**“重熙先皇帝（興宗）”である。第6行に**圻魯皇帝邛**とあるが**圻魯**が“聖宗”であることは劉鳳翥・馬俊山1983で明らかで、これにより第14行**道魯皇帝邛**も“道宗”とわかる。夫々“聖宗皇帝朝”、“道宗皇帝朝”と讀むべきである。金永田1991の解讀もそうである。《習涅墓誌》の死亡記事5ヶ所はこうである。

行數	享年	行數	死者名	続柄
(10)	五冬莽77	(9)	<b>魯魯中元云</b> (直魯姑郎君)	父
(11)	五世卅24	(11)	<b>凡魯魯仁</b> (故夫人)	父の先妻
(13)	五冬莽56	(12)	<b>魯魯仁司莽凡</b> (次夫人乃合得)	母 (父の次妻)
(漢2)	五一 51	(17)	<b>安突</b> (公 即ち習涅)	墓主本人
(21)	五元突39	(20)	<b>凡魯魯莽</b> (故捺割)	習涅の次妻

そこで習涅世系の年表を作成すると附表1のようになる。

契丹大字《習涅墓誌》に3ヶ所日付を記したものがあり次の如くである

。第17行 丞俊三尚昂崇十一月十五日寺は漢文墓誌の墓主死亡日と一致し“天慶三癸巳年十一月十五日に”で、第25行 丞俊州奈馬地天崇日天從奈は葬日と思われ“天慶四甲午年庚子日庚時に”である。

第13行 丞正未爰辰夙月廿八日寺を劉鳳翥1991は“開泰九庚申正月廿八日に”と解釈するがその論拠はこうである。

“丞正未は年号であり爰は“九”であり、辰は“庚、辛”であり、夙は尚未解釈の地支であり、夙月廿八日寺は“正月廿八日に”である。遼代年号中九年で庚或いは辛であるのは、ただ統和開泰と重熙の三つだけがある。統和と重熙はどちらもすでに釈出されており、それらはどちらも丞正未とはしない。そこで上述の紀年中の年号丞正未は開泰をおいて該当がない。開泰九年は庚申であるから、そこで夙が“申”即ち“猿”の意味であると決定できる。

又吉林図書館にある《大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑》の契丹大字拓本から丞正未 夙崇寺を復元して“開泰七年に”と釈讀した。今《承德府志》により同碑漢文の日付を調べると夫人発願で清寧六（原文八に誤る）年庚子歳に作起、辰次一周し咸雍八年壬子歳に完工した。この間奇瑞として咸雍五年九月九日祥雲地をはらい、翌年十一月既望（十六日）光氣天を燭し、咸雍六年冬静安寺名を勅賜されたことを記載している。この間12年、静安寺が創建された縁起を述べる中に突如として開泰七年が現れるなど予想出来ず、私は次のように考える。

劉鳳翥のいう 夙崇“七年”の夙“七”は、“鼠”を表わす崇の筈で、開泰でなく清寧鼠年ではないか。丞正未 崇崇“清寧鼠年”と讀めば静安寺起工の年と一致し無理なく解釈出来よう。

従って《習涅墓誌》の丞正未も“清寧”であり、その九年は“癸卯”であるのを 辰夙“辛卯”と誤記したものと思われ、夙は“申”でなくて“卯”であろう。

耶律習涅は天慶三年（1113）五十一歳で死亡したのでその生年は清寧九年（1063）である。

墓誌に記載された日付を附表2により個々に調べると、契丹小字の8石については、墓主の誕生日を記したもの2、墓主の死亡日を記したもの8

(内1は死亡年のみ)、葬日を記したもの8、その他の日付1でこれは遼中京の失陥日である。蕭孝忠墓誌を除く契丹大字の6石については附表3の如く墓主の死亡日を記したものは5、墓主の葬日を記したもの6、その他の日付を記したもの1でこれは墓主の誕生日を記したものに違いない。

蕭孝忠のは次々に死亡した5人の妻嬪の合葬追善供養の墓誌というべきで、死亡日付5、その他の日付2(何の日付か明らかでないが誕生日ではない)、最も新しい日付は合葬日と考えられる。

従って《習渥墓誌》第13行 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 は“清寧九辛(実は癸)卯正月廿八日に生る”と讀める。第14行 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 は漢文墓誌の“公自大安間從仕歷左祇候郎君”に當る。𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 は《袍魯墓誌》末行にあり“大安”と釈讀され、𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 は“七年” 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “歲廿九で” 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “任左祇候”である。

同じ第14行に上述の“道宗皇帝朝”の句があり、第16行 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 は次の天祚の“乾統十年に”と解釈して差支えがない。第17行に 𐰽𐰺𐰽 “公”が 𐰽𐰺𐰽 “遘疾”して遂に 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “天慶三癸巳年十一月十五日に” 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “死亡した”ことを叙述している。即ち習渥の一生である。漢文墓誌第16-17行の“即以天慶四年三月二十五日葬於嘉鹿山先塋之側、與妻捺割合祔焉礼也”に當るのは契丹文第25行以降である。 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “天慶四甲午年庚子日庚時に”、𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “(次)夫人西因得”の手で先塋である 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “嘉鹿山に” 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 “故夫人捺割得”と與に合祔し葬礼が行われたことを記す。

## 七、契丹大字の讀音

### A 借用漢語

契丹大字中借用漢語を表わしたものは漢語の通り発音したものと考えられる。契丹小字についてはこのことが明らかになっているので夫々対照して見よう。

#### 1、帝后名

#### 契丹小字

𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽	聖宗皇帝	𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽	ŋing sung ɣong di
𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽	道宗皇帝	𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽 𐰽𐰺𐰽	dau sung ɣong di

之及天太后	儀天太后	安 <sup>今</sup> 交 <sup>秀</sup> 丕 介	ngi ten tai 7 ou
太子	太子	丕 今 答	tai si
2、王名			
大王	大王	丕 去	dai ong
侏王	郡王	九亦 去	gün ong
3、三師三公			
太臬	太師	丕 死	tai ši
太傅	太傅	丕 今	tai fu
太保	太保	丕 舟反	tai bau
太尉	太尉	丕 火	tai ui
4、將軍			
金役太將示	金吾大將軍	九又 安反 火 今 今 九亦	gim ngu dai siang gūn
將示	將軍	今 九亦	siang gūn
小將示	小將軍	今 考 今 九亦	siau siang gūn
5、夫人			
平平王夫人	西平郡王夫人	今 大 上 九亦 去 今 伏	si ping gūn ong fu sin
崔仁 死 石	夫人留女	今 伏 中 西 公 火	fu sin liu nü
6、官名			
西京副留守	西京副留守	今 火 九 同 今 中 西 又 去	si ging fu liu ʅou
使相	使相	死 今 並	si siang
將副	將副	今 今 今	siang fu
都招討	都招討	亡 語 元	du ʅau tau
7、人名			
王家奴	王家奴	去 九 才 公 反	ong gia nu
韓家奴	韓家奴	並 央 九 才 公 反	qan gia nu
劉家奴	劉家奴	中 西 九 才 公 反	liu gia nu
藥師奴	藥師奴	百 央 死 公 反	yau ši nu
藥師女	藥師女	百 央 死 公 火	yau ši nü

B 契丹語

契丹語については史書に書き傳えられた古語彙や契丹小字から、遡って

契丹大字の音を復元しなければならない。以下若干例を挙げる：

1、數詞五について

契丹小字では數詞 𐰺𐰽 “百五” の音 *ɣau tau* を招討に当てて表示していたことがわかっている（許33、仲9）。又《遼史》五三嘉儀の五月重五日項に“討五 賽咿咿月也”と明示する。

契丹大字で“五”は漢字をその儘使用して五とするが発音は討 *tau* であった可能性がある。

2、兔（十二支の卯）について

《遼史》で“兔”を陶里とし、契丹小字では  $\text{𐰺𐰽}$  と書くが分析すると、*tau 𐰺 la 𐰽(y)a* であり華夷訳語討來と一致する。契丹大字で十二支の“卯”即ち“兔”を 𐰺 と書き、小字同様に五の字を含んでいるので、発音はやはり *taula (y)* であつたらう。

3、馬（十二支の午）について

契丹小字で“馬”を  $\text{𐰺𐰽}$  MR と書いて *mori* を表示する。華夷訳語では抹鄰<sup>モリ</sup>である。契丹大字では“馬”を簡單化して 𐰺 とするが、発音は契丹小字同様 *mori* であつたらう。

4、蛇（十二支の巳）について

契丹小字で“蛇”を  $\text{𐰺𐰽}$  と書くが華夷訳音の抹孩 *mo ɣ ai* と同音であることは既に劉鳳翥が《再探》で説いている。契丹大字で“蛇”を 𐰺 と書くが、やはり同様に発音したのであろう。

5、牛（十二支の丑）について

契丹小字で“牛”は 𐰺 と書かれる。私は 𐰺 と 𐰽 を組み合わせた  $\text{𐰺𐰽}$  が“夜”を表わすことを知った。

$\text{𐰺𐰽}$  “夜昼”（許10）、 $\text{𐰺𐰽} \dots \text{𐰺𐰽}$  “夜…夜”（許42）、 $\text{𐰺𐰽}$  “夜の時”、 $\text{𐰺𐰽}$  “此年五月二日の夜薨ず”（仲26）。

私は  $\text{𐰺𐰽}$  に対して *söni* の音を当て 𐰺 を S、𐰽 を N と推定する。そして 𐰺 が“牛”を意味するのは兀你額又は兀你延 *üniye*（乳牛）から來たらしい。契丹大字で“牛”は 𐰺 と書かれるが私は同様に音 *üniye* と推定する。

6、鷄（十二支の酉）について

契丹小字で“鷄”は  $\text{𐰺𐰽}$  と書かれ、華夷訳語にある塔乞牙 *takiya* と比較す



6、(A) 甲と乙のBC' (C') 丙 9、11行

7、丙は乙のB 13行

キーワードAには **次子早育之** “大国舅” と **受守已早育之** “乙室已国舅” とがあり、漢文ではどちらも “大国舅” とする。

キーワードBに当るものは **ニ脊** であり私は “兒” と解釈し、キーワードCに当るものは **凡** であり私は “子” と解釈した。詳しく見るとBにはC' (男) C'' (娘) との組み合わせがある。

B	<b>ニ脊</b>	(兒)	13行
B + C	<b>ニ脊凡</b>	(兒子)	5、21行
B + C, C'	<b>ニ脊凡凡</b>	(兒子、子男)	22行
B + C'	<b>ニ脊凡</b>	(兒子男)	9行
B + C''	<b>ニ脊化凡</b>	(兒娘)	7、11行

次掲契丹大字文に対応する漢文墓誌を再録するところである：

行數	漢文行	
19	9 - 10	故妹杷兒娘子適大国舅韓家奴太保。
20	10	次妹年歲好娘子適大国舅拽刺將軍。
20-21	10 - 11	故妻捺割大国舅乍里太師女也。
21-22	11	次妻大国舅阿思不里太師女也、男正臣。

我々の契丹語の知識がまだ浅薄なので文章のすべてを解讀することは出来ないが、いくつか解讀の手がかりを提供しておいたので、今後新資料の発見によって更に新しい進展がなされることを期待したい。

契丹文習渥墓誌の類型とキーワード

甲 乙 BC" 丙 A 丁  
 7 荒守父安安行二峯化有ニ川今谷果有瓜受寸已早有芝共亦父耶太守冬面芥  
 留守と達曷女の 児 娘 □ 故葉師女得註 乙室已 国舅 □□□□□ に適す

丙 A 丁  
 19 瓜今瓜州丸有瓜反予早勾之卷田 ----- 王牙化太申峯冬面  
 故 杷 児 得註 大 国舅 帳 韓家奴太保に 適す

丙 A 丁  
 20 史史姑瓜文寸已早有芝卷田米 ----- 可ニ将示峯冬抄  
 年歳好得 乙室已 国舅 帳 披刺將軍に 適す

丙 A 甲 乙 BC  
 5 屏早統三省仁否史安行天予早有芝芒另太初峯罪叔否史安行ニ峯此  
 西平郡王 夫人 蕭 女註 大 国舅 □□太尉□□と 蕭女の 児子

丙 A 甲 乙 BC  
 20 瓜今峯米 天予早有芝峯洛太果安安行ニ峯此

丙 A 甲 乙 BC  
 21 故 捺割註 大 国舅 乍里太師と□女の 児子

丙 A 甲 乙 BC  
 21 荒峯仁屏列瓜受寸已早有芝 卷田 米 峯 峯 没 太 果 尖 故 行 安 行 二 峯 此  
 22 次夫人 西因得註 乙室已 国舅 帳 阿思不里太師と□□□女の 児子

C 戊  
 此元安仅光无云  
 子男 正臣 郎君

丙 A 甲 C  
 6 益京早完并胤工峯仁父安安行受寸已早有芝行余将早瓜  
 西京副留守 観音夫人 達曷女註 乙室已 国舅 □□将福の子

丙 A 甲 C  
 8 峯仁肉田瓜天予早有芝卷田支至荒亦死牛太三兒瓜  
 夫人□田得註 大 国舅 帳 □ 韓留 □□□大王の □子

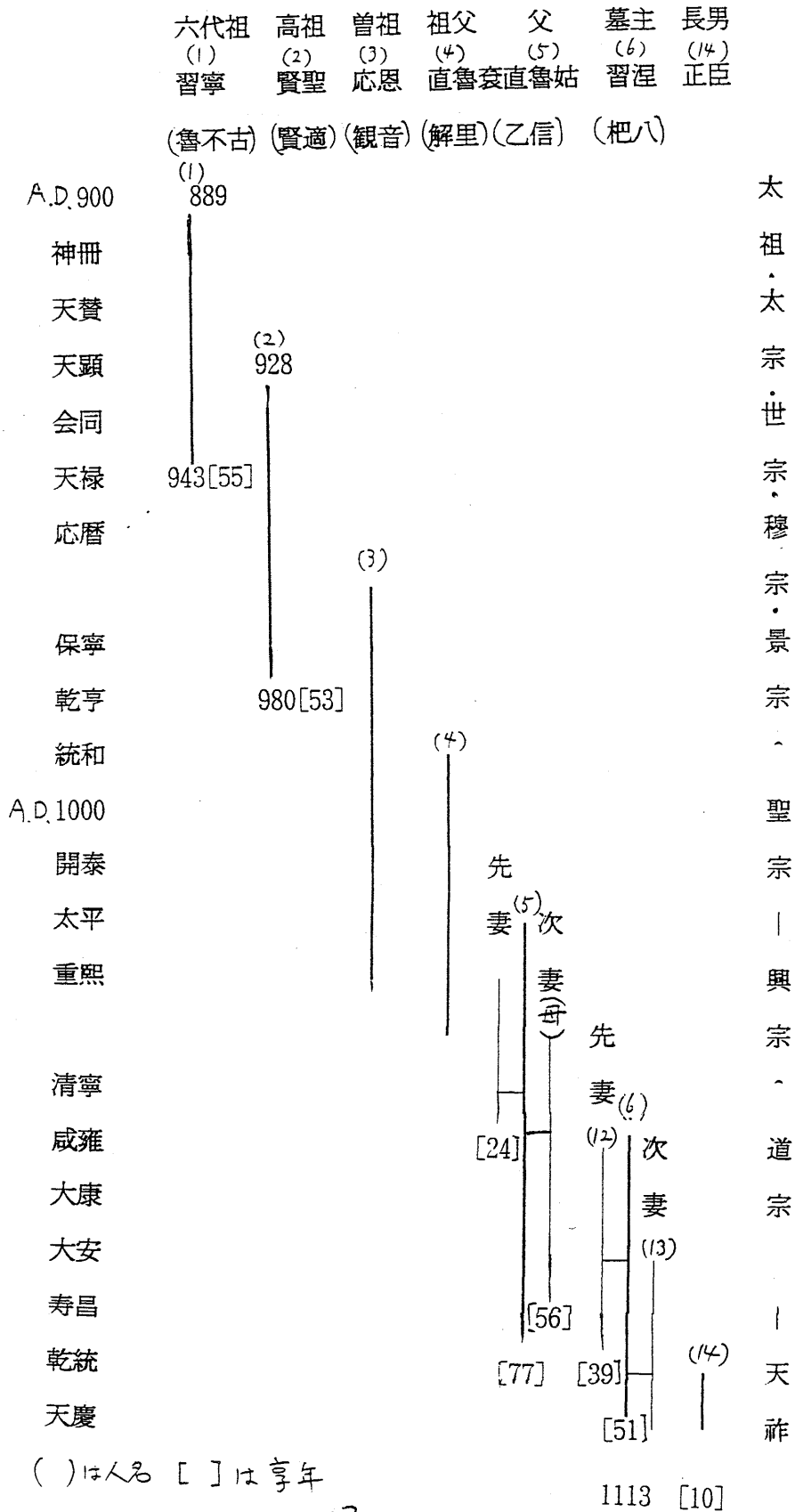
甲 乙 B C 丙  
 9 并介(敦)太初肉田瓜ニ峯瓜及已者并并无云  
 直魯衰 太尉と□田得の 児子男 □ 直魯姑郎君

甲 乙 B C 丙  
 11 受寸已早有芝之及牛无而吾峯子瓜ニ峯化有瓜今峯仁  
 乙室已 国舅 儀 牛郎君と□□子得の 児 娘 故 夫人

丙 乙 B  
 13 安交并无并究舟太安行ニ峯  
 公註 郎君 鄭九長女の 児



付表1 耶律習涅世系推定年表



( )は人名 [ ]は享年

付表2 契丹小字墓誌の日付

	誕生日	享年	死亡日	葬日
興			重熙24. 8. 4 (1055)	清寧元. 11. 10 (1055)
仁		62	大康 2. 3. 6 (1076)	此年 6. 10 (1076)
令		58	重熙23. (1054)	清寧 3. 2. 27 (1057)
道			壽昌 7. 1. 13 (1101)	此年 6. 23 (1101)
宣			大康 1. 11. 3 (1075)	乾統 1. 6. 23 (1101)
許		70	乾統 3. 2. 2 (1103)	乾統 5. 2. 21 (1105)
故	大康 7. 5. 18 (1081)	35	天慶 5. 1. 11 (1115)	此年 4. 10 (1115)
仲	大安 6. 5. 3 (1090)	61	天德 2. 5. 2 (1150)	天德 2. 9. 19 (1150)
”	遼中京失陥日 天輔 6. 1. 16 (1122)			

付表3 契丹大字墓誌の日付

	誕生日	享年	死亡日	葬日
応曆		64		応曆16. 8. 11 (966)
延寧		39	統和 3. 12. 30 (985)	統和 4. 11. 18 (986)
北大王		69	重熙10. 2. 15 (1041)	此年 10. 8 (1041)
太師記			重熙 20. 3. (1051)	重熙25. 10. 22 (1056)
抱魯		72	大安 5. 1. 23 (1089)	大安 6. 3. 19 (1090)
習涅	清寧 9. 1. 28 (1063)	51	天慶 3. 11. 15 (1113)	天慶 4. 3. 25 (1114)
孝忠	前嬪		重熙23. 5. 26 (1054)	
	次妻	28	清寧10. 4. 28 (1064)	
	第3夫人		咸雍 2. 3. 15 (1066)	
	第4嬪		咸雍 3. 4. -- (1067)	
	第5小娘子 漢兒 蘇哥		大康 3. 3. 26 (1077)	大安 5. 12. 25 (1089)

附表4 契丹大字借用漢字の音韻表

	bp	m	v	f	dt	nl	zcs	ŷ	č	š	ž	g	k	q	ŋ	ng	ゼロ			
概括	P	M	F	T	NL	S		Č	Š			K					0			
東鍾																	傳宗 sung			
江陽																	將相 siang	皇皇 王王 7 ong ong		
魚模																	付傳 靜都 化奴 鼻副 du nu 芥夫 石女 fu nü	侵吾 ngu		
支思																	子子 si[ʒf]	果 師使 si		
齊微																	帝帝 di	豆西 犀 si	之及儀 桐尉 ngi ui	
皆來																	太 大 天 太 lai			
真文																		仁人 阮郡 sin 朵耶 gün		
寒山																		山山 豆韓 san qan		
先天																		天 天 殿 ten		
蕭豪	東保 bau																	道 道 邑 討 dau tau	小小 岑 招 siau ʒau	吞 葉 yau
家麻																		牙 家 gia		
尤侯																		荒 留 劉 liu	守 守 后 后 sou 7 ou	
侵尋																		金 金 gin		
庚青	乎 平 ping																	冲 聖 京 京 sing ging		